

## [総合的な学習の時間]

## 小学校から始めるキャリア教育の取組

## －6年 総合的な学習の時間「12才のハローワーク」の実践－

渡邊 進\*

## 1 はじめに

ニートと呼ばれる若者やフリーターが増えてきていると言われている。総務省の労働力調査などによると、15才から34才のニートは、2000年の44万人であったのに対し、2004年では64万人に急増している。<sup>1)</sup>また、リストラという言葉も新聞などマスコミで多く取り沙汰され、失業率も依然として高い状態が続いている。平成11年には、作家の村上龍氏が「13才のハローワーク」<sup>2)</sup>を出版し、ベストセラーとなった。文部科学省もこうした状況を受け、大学などで行われているキャリア教育を重点的に支援する方針を決めている。<sup>1)</sup>

小学校高学年段階の子どもも、上記のような言葉や状態をメディアを通じて知ったり、親や大人の会話の中で聞いたりしている。就職という視点での、子どもたちの将来を取り巻く現状は厳しいものであると言わざるを得ない。

このような状況の中、平成16年度、17年度と2年続けて6年生を担任した。小学校6年生段階は、「将来は○○になりたい。」と夢を膨らませたり、「こんな仕事がおもしろそうだな。」と興味を持ち始めたりする時期である。中学校・高校段階では、進学や受験に伴う進路選択が目前に迫り、職業に対する意識が現実味を帯びてくる。それに対して小学校段階の子どもにはまだ、進路選択の切実感は少ないととらえる。したがって、小学校段階におけるキャリア教育の意義としては、「多様な職業や生き方を知り、自己の生き方を見つめる」ことにあるととらえる。

実態をとらえる上での参考として、国立教育政策研究所生徒指導研究センターからは、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）～職業的（進路）発達にかかる諸能力の育成の視点から～」として、小学校・中学校・高校それぞれの段階で「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの視点から身に付けさせたい具体的な姿が示されている。<sup>3)</sup>

中学・高校の職場体験活動などにつなげていく意味でも、小学校段階から職業や仕事に関する活動を充実させることで、子どもたちが将来に対して希望を持って成長し、職業に就くことを真剣に考える、つまり、生きていくことに正対するきっかけを作ることができると考えた。

当校は十日町市中心部にあり、校区には商店街や大型店もある。十日町市の伝統的な産業である織物・着物産業関係の会社も多く、子どもたちの家族や親戚でこのような仕事に携わっている方も多い。さらに、鉄道はJR飯山線とほくほく線の駅があり、交通・乗り物にかかる仕事という面からも特長がある。

より多くの職種を知って自分に合う仕事を考えたり、仕事をしている人々の人となりにふれたりすることで、子どもたちが社会に出て働くことについて明るい希望を持ちにくいという状態を少しでも変えることができると考え、本実践を行った。

## 2 研究の目的

小学校6年生段階の子どもに職業観・勤労観を育み、就労意欲を高める活動構成と支援を明らかにする。

※三村（2004）は、職業観と勤労観を二層構造ととらえ、勤労観を基盤に職業観が形成されるとしている。<sup>4)</sup>

「職業観」…職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度、および職業をとおして果たす役割の意味やその内容についての考え方

「勤労観」…日常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、および役割を果たす意味やその内容についての考え方

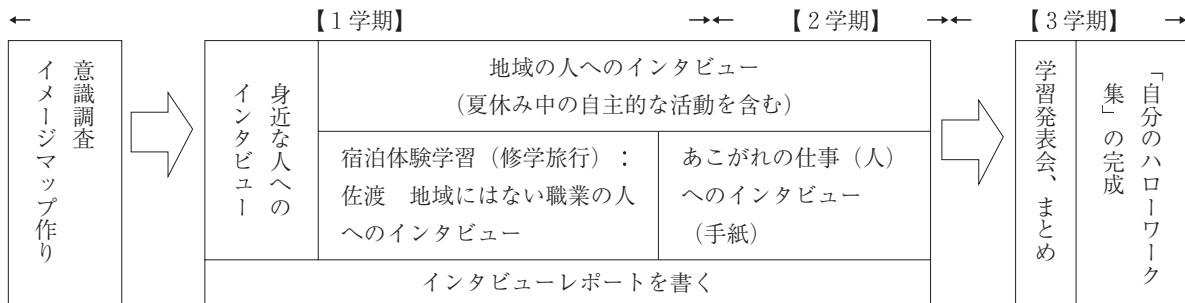
\*十日町市立十日町小学校

### 3 研究の内容

- (1) 子どもが、将来の職業や生きていくことについて真剣に考えることのできる活動構成と支援の工夫
- (2) 職業に対する子どもの興味・関心を高め、就職に向けた具体的なステップを知ることのできる情報源の開拓

### 4 活動の実際 【平成16年度 6年生2クラス（男子40名 女子40名 計80名）】

#### (1) 活動構想（概略）



#### (2) 活動前意識調査

まず、子どもたちに「職業・仕事と言われて思いつくのは？」と問いかけ、各学級でイメージマップつくりをした。ここでは、職業・仕事に対する子どもたちの正直な印象を引き出すために、あえて「どんな言葉でもいいよ。」と前置きした。すると予想通り、「倒産」「赤字」「リストラ」などのマイナスイメージの言葉が先行したが、中には「大切ななもの」「生きていく」「夢」といったプラスイメージの言葉を語る子どもも少なからず見られた。

学級全体でイメージマップをまとめた後、村上龍氏著「13才のハローワーク」を紹介した。本の帯にある「いい学校を出て、いい会社に入れば安心という時代は終わった。好きで好きでしようがないことを、職業として考えてみませんか。」という言葉を投げかけ、前書きを読ませた。多くの子どもが、「13才、あるいはその前後の年齢の子どもたちにとって大切なことは、好奇心を失わず、できれば好奇心の対象を探すことです。(中略) 子どもは誰でも好奇心を持っています。好奇心は、大人になって一人で生きていくためのスキル(専門的な技術)や、そのための訓練をする上で、非常に重要になります。(中略) 子どもが、好きな学問やスポーツや技術や職業などをできるだけ早い時期に選ぶことができれば、その子どもにはアドバンテージ(有利性)が生まれます。(後略)」という部分に強い興味を持ち、感想をまとめた。

村上龍さんの言うとおりだと思う。自分が嫌いなことをいやいやするのではなく、好きなことを仕事にして思いっきりやってみたい。その方が幸せだと思う。いい学校って何だろう。有名な大学がいい学校なんだろうか。私は将来看護師になりたいので、看護学校は大学ではないし、大学に行かなくてもいい。看護学校でしっかり勉強して、いい看護師になりたい。

(C子)

この後、「どうせならできるだけたくさんの人、100人を目標に、職業・仕事についてインタビューしてみよう。そうすることで、本当に自分に合う仕事が見つかるかもしれない。」と呼びかけ、次の活動へつなげた。

#### (3) 身近な人へのインタビュー

「まずは身近な人から、仕事について話を聞いてみよう」と提案し、親にインタビューする活動から始めた。親には、事前に学年便りで活動の趣旨を説明し、「返答期限は設けないが、子どもたちが自主的にインタビューをしに来た場合は極力協力してほしい。」と呼びかけた。最初のインタビューということで、子どもたちと相談して全員共通の項目を決め、同じ質問内容で取り組んだ。

- Q1: どうしてこの仕事に就こうと思ったのか。  
 Q2: この仕事をしていて楽しい（うれしい）ときは？ どんなことが「やりがい」？  
 Q3: この仕事をしていて悲しい（つらい）ときは？  
 Q4: どうしたらこの仕事に就けるか。必要な心構えや技能、資格は？  
 Q5: 仕事をしているとき、気を付けている（心掛けている）ことは？  
 Q6: わたしたちへのメッセージは？

※この他に、子どもたちが自分で質問したいことがある場合には、付け加えるようにした。

病院で医療事務をしている母にインタビューしたY子は、今まで気付かなかった母の仕事の様子や思いに触れた。

【Y子から母親へのインタビューの様子】

Q1：どうしてこの仕事に就こうと思ったのか。  
A→小さい頃から、病院の仕事をしたいと思っていた。

Q2：この仕事をしていて楽しい（うれしい）ときは？  
どんなことが「やりがい」？  
A→弱い（苦しんでいる）人の役に立てること。

Q3：この仕事をしていて悲しい（つらい）ときは？  
A→残業が続くとき。

Q4：どうしたらこの仕事に就けるか。必要な心構えや技能、資格は？  
A→医療事務の資格が必要。病気の人の立場になること。

Q5：仕事をしているとき、気を付けている（心掛けている）ことは？  
A→いつも笑顔でいること

Q6：わたしたちへのメッセージは？  
A→病院での仕事はとてもやりがいがあります。

【Y子の感想】

今まで、「お母さんはお母さん」という見方でしかなかったけど、初めて「働いている人の一人」と見ることができました。お母さんは、仕事がすごく大変そうでした。でも、「仕事はやりがいがある。」という答えから、（大変だけど、好きな仕事だからがんばっているんだな。）と思いました。お母さんは、子どもの頃体が弱かったから、やさしい病院の人にあこがれたそうです。これからも、仕事をがんばってほしいです。

普段は、「職業」「働く人」という観点で見ることの少ない家族の、仕事にかける思いや苦労などを知ることができ、「家族に対する見方が変わった。」と話す子どもたちがいた。同時に、「働いて生計を立てること」が、少し身近なものに感じられてきた様子がうかがえた。

(4) 身近な地域にはない職業の人へのインタビュー

宿泊体験学習は、伝統文化を大切にし、自然環境保護に携わる人も多い佐渡を選んだ。見学箇所や宿泊先など、行程を通じてかかわる人には、事前に上記のような質問内容を旅行会社を通じて知らせておき、活動に対して支援していただくようにした。伝統工芸の指導員や宿泊施設の従業員、地引網漁師、バスの運転手やバスガイド、旅行会社の添乗員まで、子どもたちはそれぞれインタビューしたい相手を考え、積極的に取材していった。

中でも、地引網漁師は、会社の社長で高収入を得ていたにもかかわらず脱サラをして、小さいころからの夢だった漁師に転職した人であった。子どもたちにとって、高収入の生活を捨ててまで夢を実現させた生き方は驚きであり、「好きなことを仕事にする。」という点で関心を高めることにつながった。

佐渡宿泊体験学習後、一人一人が感想文を書くとともに、インタビューした人それぞれについてのレポートをまとめた。そして、地引網漁師（平石さん）の生き方を取り上げ、「平石さんの生き方をどう思うか」というテーマでグループごとの話し合い活動を設定した。話し合いを終えて、次のような子どもの感想があった。



写真1 地引網漁師の話を聞く

「平石さんの生き方はいいと思う。」とか、「自分が好きな仕事をやっているのはいい。」という意見が出ました。だけど、「お金がなくて、家族を困らせる。」という意見も出ました。このことからぼくは、「自分の好きでやっている仕事でいいと思うけど、周囲の人たちを巻き込んではいけない。」と思いました。（J男）

「社長さんの方が漁師さんよりももうかるから、やめない方が良かったんじゃないかな。」という意見がたくさん出ました。私もその意見に賛成でした。でも、その反対の意見も出ました。「自分がなりたかった仕事ができて幸せだ。」という意見を出した人もいました。実は、私はその意見にも賛成です。このことから私は、「仕事は自分が好きなものを作ったり使ったり、好きなことをする仕事をやったりすれば、お金のことなんてあまり考えなくてもいいんじゃないかな。」と思いました。「漁師さんの仕事は平石さんにぴったりの仕事だ。」と考えました。（F子）

話し合いを通して子どもたちは、価値観は人によって異なることや、職業を選んだり実際に働いたりする際にも価値観が影響するということを感じることができた。また、お金や好きなこと、家族、地位、名声など、子どもの価値観は多様であることを改めて把握することができた。

(5) 地域住民へのインタビュー

宿泊体験学習後、地域へ出かけてインタビューする活動を始めた。基本的に個々の活動となるため、また、子どもの取材対象箇所はほぼ無限となるため、担任から商店や会社に事前に質問内容を知らせておくなどのいわゆる「根回し」はしなかった。もし、質問の仕方がよくなかったり態度が悪かったりして苦情や抗議等が来た場合は、子

どもと一緒に出向き、謝ってくるつもりでいた。それも大切な学習ととらえていた。しかし実際には、校区ということもあり、子どもたちに事前指導として「まず自分が名乗ること。」「何のために来たのか告げること。」「『インタビューさせていただいてもよいですか？』と聞き、断られた場合には潔く引き下がること。」を話しておいた。これにより、子どもたちの態度や活動に対する苦情や抗議等はなかった。後日談として、保護者経由で理解を求めていた部分もあったことを聞いた。

1学期末、「夏休みは、家族とともにいろいろな場所へ出かけたり、お盆 」写真2 文具店での取材活動  
で親戚の人が帰省したりするので、話を聞く機会が多くある。普段は話を聞きに行けないような人へ積極的にインタビューしよう。」と呼びかけ、自主課題の一つとしてインタビューを設定した。A子は、1学期中から積極的にインタビュー活動に取り組み、校外へ出かけられないときは校長室への取材を行うなど、意欲的に活動に取り組んできた。A子の夏休み中の取材人数は60人を越え、総取材人数はこの時点で100人を超えた。A子の母親は着物関係の仕事をしており、その関係で着物にかかる仕事に興味を持ったA子は、着物関係の仕事に携わる多くの人にインタビューした。取材した人の多くが、「十日町は着物の町。その伝統をなくしたくないのでこの仕事に就いた。」と答えるのを聞き、以下のように感想をまとめた。

私は学校で、着物サークルに入っているけど、もっとたくさんの人に着物のよさを伝えたい。そのために、できるだけ着物を着る機会を多くして、みんなに見てもらったり、日本の文化のよさを伝えたりしていきたい。

ただインタビューして感想をまとめるだけでなく、少しずつ自分の将来の生活に結び付けて考えを深めている様子が分かる。さらに、将来保育士になるのが夢であるN子は、自分が卒園した保育園を訪ねて先生にインタビューしたり保育体験をしたりした後、次のように感想を書いた。

自分を受け持ってくれた先生が、どんな気持ちで子どもたちに接しているか分かった。自分を受け持ったときも、こんな気持ちで接してくれていたんだろうなと考えると、うれしくなる。自分もこの先生のように、子どもたちのことを本気で考える先生になりたい。そのために、小学校では低学年の子たちに優しく接していくようにしたい。

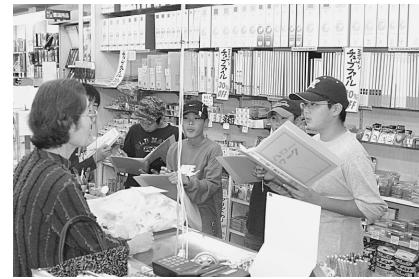
将来なりたい職業があり、その職業について直接調べることができた子どもたちに、職業や仕事についての希望が具体的に膨らんできたことが分かる。また、自分の言動を振り返り、普段の生活を向上させようとしたり直したりしていきたいと願う子どもたちの姿が見られるようになった。インタビュー活動を通して「働く人やその人となり」や「職業・仕事の現実」に触れ、自己を見つめる力が身に付いてきたと言える。

## (6) あこがれの人へのインタビュー

子どもたちがあこがれる職業は、身近にはない場合も多かった。そこで、地域へのインタビューと同時進行で、手紙による取材を行った。とはいっても、活動の内容や趣旨を直接説明できず、手紙を読んでもらえるのかさえ分からぬ状況であることは担任も子どもも承知していた。しかし、取り組む前からあきらめるのではなく、とりあえず挑戦してみようということで、国語の「依頼状を書こう」の単元と関連させながら手紙を書き、一人一人が送ってみた。

返事がない場合も多かったが、いくつかの相手から返事が来た。プロ野球巨人軍の選手に質問したところ、広報担当から丁寧な回答があった。

また、陸上競技ハンマー投げのアテネオリンピック金メダリストである室伏広治選手、お笑い芸人「テツ＆トモ」の兩人からは、直筆の回答が来た。手紙を送った子どもが喜んだのは言うまでもない。室伏選手から回答を受けたD男は、「自分の夢もきっとかなえてみせる。そのために、今から少しづつ準備していく。」とレポートに綴っていた。遠い存在と思っていた「あこがれの職業（人）」や「夢の職業（人）」から直接質問に答えてもらったことで、自分の生き方や将来、夢に対して希望を抱き、より具体的に見据え始めた子どもの姿が見られた。



## 写真2 文具店での取材活動

わたしのハローワーク カード		備考
レポーター氏名 6年 組		会員登録
取扱日	取扱する(扶助してくださる)の会員名	会員登録
月 日 ( )	寺子 広治	会員登録
Q1: どうしてこの仕事をつとめ始めたのか		
父親が同じ仕事をはじめてから、私も一緒にあつたから		
高校生の時、自分自身からこなしてつづいていたから		
Q2: この仕事をしていて楽しい(うれしい)ときは? どんなことが「やりがい」?		
成績が良い時、結果が2点以上もうれしいが、		
自分で新しい会員登録をする時		
Q3: この仕事をしていて悲しい(くらやみ)ときは?		
不思議の自ら次第で、うつむきをもつてしまってかじき		
もふもふ大事、嬉しいことを見つけてあひだら見てます。		
Q4: どうしたらこの仕事をつとめるか? 必要な心がまえや技術、資格は?		
自分の会員登録を自分でやる時、スルーリングの読み方		
運動能力がもつていて、思ひどり、日本の人々が苦手とこなして種目9回目		
努力が必要だと思ふ。		
Q5: 仕事をしていると、気を付けている(心がけている)ことは?		
一工夫気を付けて、ちょっと運んで、うつむきを重ねねどり。		
間違ひのないようにコサートアドバイスを尽くす。		
Q6: わたしたちへのメッセージは?		
努力 人づけがうまくいくと、人々はうれしいところまで。		
Q7: (自分で質問しないことがあつたら書こう!)		
○ 実は、あることは今まで叶わなかったのですが、今まで叶えてくれた、		
○ 何よりも感謝の気持ちで、数字は数えきれないほど。		
○ 今まですべての人に感謝の気持ちであります。		

図1 室伏広治選手の回答

### (7) 学習発表会

3月上旬。1年間の学習の成果を発表する場として、全校で学習発表会が設定された。6年生は基本的に個の活動であったので、一人10秒程度の持ち時間で全員が一言ずつ思いを語ることにした。

- ・看護師になることは、小さいころからの夢でした。実際にインタビューをして、看護師になりたいという気持ちが大きくなりました。 (M子)
- ・活動をする前は将来の夢がなかったけど、インタビューをして見つかった。ハローワーク活動をしてよかったです。 (S男)
- ・親も含めて、働いている大人のことを、自分や家のためにがんばって働いているんだなと思うようになった。 (K男)
- ・ハローワーク活動をする前は、ファッションデザイナーになる夢をあきらめようとしていたけど、いろいろな人から「夢をあきらめてはいけない。」と言われて、やっぱり夢を追いかけようと心に決めた。これからは、この夢を忘れずに努力していきたい。 (S子)

1年間の活動を振り返っての作文では、以下のような記述があった。

- ・自分が学校に行けるのは、親が苦労してがんばっているからだ。だから、大人になったら親にいろいろなことをしてあげたい。動物関係の仕事につくという自分の夢もあきらめない。 (I男)
- ・活動前は何となくトリマーになりたいと思っていたけど、ハローワーク活動をしてその気持ちが前よりも強くなった。家で犬を洗うときも、以前より手伝うようになった。 (B子)
- ・活動前は仕事なんてしたくないと思っていたけど、今は、どんな職業についても一生懸命やりたいと思うようになった。自分は変わった。 (D子)
- ・活動前は、大人になんてなりたくない、ずっと子どものまま遊んでいたいと思っていたけど、今は早く大人になって、いろいろな人と会話をしながら仕事がしたいと思うようになった。 (R男)

子どもたちの発表する姿や作文からは、将来に向けての希望や決意、大人に対する見方の変化など、肯定的な意識が多く見られた。また、B子のように、実生活における言動に変化・成長が見られる子どももいた。職業・仕事というフィルターを通して人々の生き方にふれ、自己の言動を振り返っていると言える。これらの姿こそ、総合的な学習の時間のねらいである「自己の生き方を見つめる」ことを具現した姿であるととらえる。

## 5 活動の成果

### (1) より多くの人に直接話を聞く活動を繰り返すことで、自己の生き方を見つめた子ども

これまで紹介してきたように、職業・仕事に対する子どもの意識が、活動を通して変容してきたことは明らかである。D子は、1学期の段階では将来の職業についての考えは持っていないかったが、3学期末の作文で「具体的にはまだ決まっていないけど、人の役に立つ仕事をしたい。仕事ということをしっかり考えるようになった」という点で、自分が変わったと思う。」と述べている。このように、それまでぼんやりとしか考えていなかった職業・仕事ということについて、より具体的に考えるようになった子どもが多く見られた。これは、いろいろな職種の人に話を聞く活動を繰り返してきたことの一つの成果だととらえる。

また、本やインターネットで調べる活動よりも、直接話を聞いたり見たり体験したりする活動を重視したことも、子どもたちにとって心に響く要因となったと考える。

### (2) 小学校卒業後も続く就労意欲

1年目にハローワーク活動に取り組んだ子どもたちに、中学生として1学期を終え、夏休み明けの9月初旬、アンケート調査を行った。アンケートの内容と結果は以下の通りである。(対象77人)

Q1 小学校で取り組んだハローワーク活動は、現在の自分の生活に役立っていますか。

「はい」…62人 (80.5%) 「いいえ」…3人 (3.9%) 「どちらとも言えない」…12人 (15.6%)

Q2 小学校で取り組んだハローワーク活動は、これから的生活や2年生で取り組む「職場体験活動」、進路選択に役立ちますか。また、「職場体験活動」が楽しみですか。

「役立つ」…53人 (68.8%) 「役立たない」…2人 (2.6%) 「どちらとも言えない」…22人 (28.6%)

「楽しみ」…66人 (85.7%) 「楽しみでない」…4人 (5.2%) 「どちらとも言えない」…7人 (9.1%)

Q3 自分の将来が楽しみですか。(将来、世の中に出て働くことが楽しみですか。)

「楽しみ」…47人 (61%) 「楽しみでない」…7人 (9.1%) 「どちらとも言えない」…23人 (29.9%)

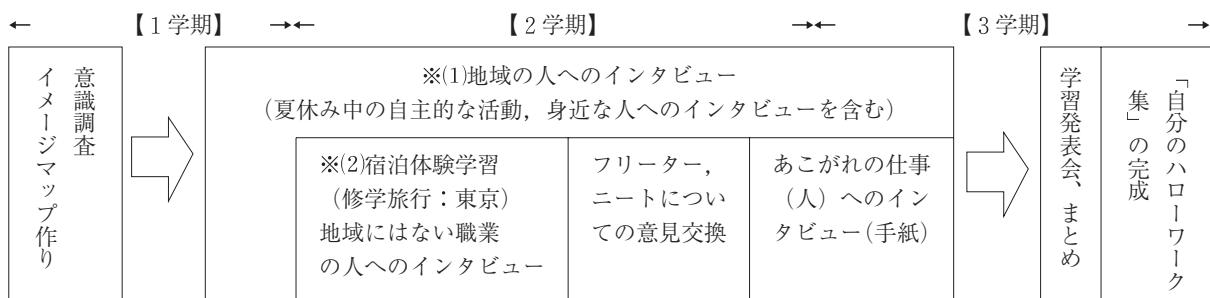
中学校へ進学して5ヶ月が過ぎた段階においても、ハローワーク活動で得た思いが子どもたちの心の中に根付いていることが分かる。また、職場体験活動や将来について「楽しみ」と答えた子どもが多いことから、将来について悲観的になることなく、希望を持つことができている。

## 6 課題とまとめ

「将来〇〇になりたい」と具体的に職種を挙げている子どもにとって、本実践では情報源の充実という点でカバーしきれない部分があり、子ども一人一人の思いを満たしてやれなかった。教室には、先述「13才のハローワーク」を始め、図書館や書店からの図書資料も置いたが、やはり現実味が薄かったようである。17年度は、次の2点から改善を加え、実践を進めている。

### (1) 人とのかかわりの一層の重視

身近な地域の人への聞き取り調査をより一層充実させるべきと考え、年間の活動を以下のように組み直した。



更に、2学級で時間をそろえ、2時間続きをすることで回数を多く確保し、地域の人へ繰り返しかかわることができるようとした。

改善を行ったことによる成果が、既に見られる。自分が散髪に行く理髪店の仕事に興味を持ったH男は、1回のインタビューだけでは満足できず、繰り返し取材を行った。2回目の取材では、話を聞くのではなく理容師の仕事ぶりの観察に重点を置き、3回目になると、マネキンを使ってカットの実習をさせていただくことができた。H男はそれまで、将来の夢に理髪店という仕事は語っていなかったが、この体験が心に響き、図工でも理容道具をモチーフにした作品を仕上げるなど、なりたい職業の1つとして理髪店をはっきりと意識するようになっている。

### (2) 宿泊体験学習（修学旅行）の見直し

中心となる活動は、表面上はインタビュー活動の繰り返しであり、質的な変容や職種の違いなどがあるものの、マンネリ化するのではないかという不安がある。インタビューを通して感じることの質的な変化は、子どもにとって実感しにくい。そこで、修学旅行の時期や旅行前後の活動に対する意識付け、手紙による取材活動などを、子どもの様子を把握しながらバランスよく織り交ぜていく。

修学旅行は、子どもたちのあこがれの職業が多くある東京でコースを設定し、グループ活動を行う予定である。地元にはない職業や、職人と呼ばれる人の生き方や仕事ぶりにふれた子どもたちが何を感じ、どのように自己を見つめていくか、楽しみである。



写真3 理髪店でのカット体験

## 引用、参考にした資料・文献

- 1) 新潟日報 2005年（平成17年）8月28日付 紙面報道
- 2) 村上 龍 「13才のハローワーク」幻冬舎、平成11年3月
- 3) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究」 報告書、平成14年11月
- 4) 三村隆男 「キャリア教育入門～その理論と実践のために～」 平成15年 実業之日本社
- 5) 「ニッポンの職業・しごと全ガイド」 平成16年3月 自由国民社